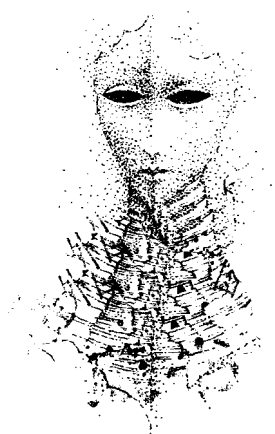


暗い旅・真夜中の太陽

倉橋由美子

倉橋由美子全作品

3



新潮社版

くらはしゆみこ
倉橋由美子全作品3

一九七五年二月二〇日発行
一九七六年四月三〇日二刷

著者 倉橋由美子

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

〒102 東京都新宿区矢来町七

電話 業務部(〇三)二六六五一一
編集部(〇三)二六六五四一一

振替 東京四一八〇八

二光印刷 新宿加藤製本

定価 九五〇円



© Yumiko Kurahashi
Printed in Japan 1975
〈第三回配本〉

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします

倉橋由美子全作品の目次

合成美女 5

暗い旅 27

輪廻 173

真夜中の太陽 195

一〇〇メートル 217

作品ノート 231

倉橋由美子全作品 3

合成美女

合成人間が完成されてすでに久しい。わが国でもここ数十年間におよそ十万人の合成人間がまわっているといわれる。しかし合成人間は依然として最高の贅沢品で、それを買うことができるのは真の強者である特権階級にかぎられていた。というのも、合成人間は二十一世紀に大流行をみたような、プラスチックと金属でできた機械的なロボットのためにはまったくことなり、文字どおり合成された蛋白質の「生きた体系」であって、工業的に大量生産しうるものではなかったのである。その製作はむしろ昔の京人形の製作にも似た芸術的作業であった。おそろしく高価なものはその理由だけでも人間の夢をかきたてる。しかもこのばあいは品物が合成された人間である。ひとびとは「合成された」ということと「人間」という概念との奇妙な結合や矛盾を直観しており、そのためにいつそうこの商

品は熱狂的な需要をひきおこしたのかもしれない。まさに合成人間ブームだった。たとえば、合成人間の女中すなわち合成女中を買うことは女性の夢だった。「この女中さん、合成、それとも天然?」「もちろん合成でござますわ」といった問答が虚栄心の発達したブルジョア夫人のあいだでとりかわされていた。いうまでもなく誇るに足るのは合成女中を所有することであって、「天然の」女中を傭っていることではない。

ところで合成女中と天然女中とはいかにして区別するか? 一般に合成人間はその外見上天然の人間とまったくことなるところはなかったといつてよい。もちろん、しゃべり、考え、食事から排泄にいたるまで人間同様におこない、人間のあいだで人間なみに生活することができる。それはだからある程度まで——その程度がまさに問題ではあったが——一箇の「人格」として取り扱われていた。しかし合成人間はあくまでも人間によって創られたものである。神が人間を創ったかどうかは不可解だとしても、人間が合成人間を創ったことには疑う余地がない。そしてこの従順な被創造物たちは、自分たちを創った「神」を知り、自分の身が合成人間であることを心得ていた。「あなたは合成なの?」と合成女中にきけば、「はい」と謙虚に答えるだ

ろう。合成人間は嘘をつかぬように創られていたのだから。しかし人間は嘘をつく。天然の女中がおくさんにいいふめられて、「あたし合成ですわ」とにこやかに断言しないともかぎらない。そこでもっとも確実な区別を求めるとすれば、解剖である（ただし合成人間の生体解剖は法律で禁じられていた）。合成人間の頭には驚くべき電子頭脳がつまっていた。内臓はほぼ人間とおなじだったが、はるかに高性能に創られており、肝硬変をおこしたり癌を発生させたりするおそれもなかった。そして人間とはことなり、あの複雑な循環装置がないかわりに、神経繊維の配線をつうじてあらゆるエネルギーの伝達と物質変換が同時におこなわれる仕組になっていた。早くいえば、合成人間には血がないのだった。

ところで、合成女と人間の女をみわける素人むきの手がひとつだけあることはよく知られていた。それは股のあいだの穴の数のちがいである。合成人間はひとつだけ穴が多く、肛門のうしろに、人工頭脳に充電するためのソケットがあったのだが、そんなわけでマダム連は客のまえで女中の下着をめくってそのあられもない部分を披露することも辞さないほどだった。もっとも最新型の自動調整式の合成女にはそのような穴はないともいわれていた。

ある秋の日曜日の午後、倫子^{みちこ}は夫といっしょに銀座の合成人間専門店にでかけた。いよいよ宿願がかなう日だった。堂々とした合成人間の老舗が軒をつらねる通りには、着飾った女たちが、いつか合成女中の買える日を夢にえがきながら歩きまわっていた。彼女たちの灼けるような羨望の視線を浴びて店にはいるだけでも倫子は幸福で息がつまりそうだった。結婚式のときでさえもこれほどではなかった。これで自分たちも「合成族」——というのは合成人間を所有するほどの金持を意味する流行語だった——の仲間入りができるのだわ、と彼女はおもった。

店員の応対は丁重をきわめた。この店に足を踏みいれるほどの客は王侯貴顕にもまさるのだ。夫妻は二階のサロンに案内された。十数人の若い女たちが人待ち顔にたえずんだり、ファッション・モデルのように歩きまわったりしていた。「どうぞごゆっくりぐらんどさい」と店主がいった。「まあ、この人たちがみんな合成人間！」と倫子はおもわず声をあげたが、この豪奢なサロンのなかではいささかはしたなく響くほどだった。合成女たちはいずれ劣らぬ美女ぞろいであり、その優美な身ごなしと典雅な微笑にであうと、倫子は商品を選ぶ客としてのあの横柄冷酷な眼も失い、おろおろして夫を振りかえった。客が商品たちに圧

倒されるとは奇妙な光景だったが、じっさいこの生きた美神の群像をみるとそれも無理ではなかったのだ。店主が合図すると、商品のひとつが、コーヒーとアントルメをもってきた。「わたくしたちはそれぞれ性格や趣味もちがっておりまして、どうか遠慮なくいろんなことをおたずねくださいませ」と彼女はいった。そして他の合成女たちも倫子のまわりに集って話しかけた。倫子はまっかになり、ただ田舎娘みたいに笑うだけだった。彼女は合成美女たちのあいだで抜きがたい劣等感に襲われ、困惑の極に達していたのである。やっと気をとりなおして倫子は品物を選びにかかった。婦人服や装身具に個性があるのと同様に合成女にも個性があった。まさに彼女たちは芸術作品であり、けっして同じ作品はないといわれていたのだから、街で自分とおなじ既成服を着た人間にであうような不愉快な目にあう心配はいらなかった。

「ねえ、どれにしましょう？ あなたもよくみて選んでくださいな」

すると夫は合成女を一人ずつ手招きして、人形でもみるように眺めた。そして遠慮なく彼女たちの胸にさわったり、手を握ってみたりするのだったが、倫子はあまりの図々しさに顔をあからめて夫の袖をひいた。夫は、品物を選ぶの

だからよく吟味するのがあたりまえだといい、店員もそのとおりだといって、彼女たちの一人一人についてその性能や特徴を説明した。だがまちがったことをいうとその合成女当人に訂正されるのだった。

けっきょく倫子を選んだのはもっとも美しいとおもわれる合成女だった。どちらかといえば内気で優しそうな顔だちをしていたが、それは彼女がみずからみせてくれた性格グラフにもしめされていた。店主も、彼女は当店自慢の品だといった。そのかわり値段もいちばん高く、若干予算を超過したが、倫子は絶対これにきめたといひはった。頭金二千万円、残り千五百万円は三十カ月の月賦だった。

「ドレスやアクセサリのお値段は別になっておりまして、頭金といっしょにちょうだいいたしますが」と店員がいった。倫子は相手の商魂が多少気にさわった。しかしまさか中身だけ買って裸で連れだすわけにもいかないわ、とおもいかえしてうなずいた。夫は店主と購入手続にとりかかった。合成人間の購入には登記が必要だし、政府の「合成人間所有許可書」も交付してもらわなければならない。この間、店員が倫子にむかってこの合成女の性能や取扱いかたを説明していた。「知能指数は一五〇でございます。教養指数は二三〇の最高値で、大学卒業程度に相当します。し

たがいまして言語能力も……」しかし倫子はほとんどうわのそらできいていた。この合成女はみればみるほど美しかった。しかもあの人形じみた美貌ではなく、人間的な不完全さの魅力をもっているところなど心憎いばかりだった。「あなたはほんとにすばらしいわ」というと、合成女はえくぼをつくって笑った。唇の横に小さなほくろまでついていた。

「社長さんのおくさまだって、こんな上等の合成女中はおもちゃでないでしょうね」と倫子は夫にいった。「女中だなんてもったいないみたい。いっそあなたの奥さんになさったら？」

すると合成女は口に手をあててくすくす笑ったが、資郎は笑いもせずに、「そんなことはできないさ。これは合成人間だから」と答えた。かれが冗談というものを解さないのは、いまにはじまったことではなかった。

倫子と夫が合成女を連れて店からでると、大勢の通行人が立ちどまって注視した。まるで式場にむかう花嫁をみながら弥次馬のように。合成女は顔を伏せ、かすかに頬を染めていた。この電子頭脳とはおもえない絶妙の反応をみると倫子はほとんど有頂天の態だった。「あなたにはいい名前をつけてあげるわ、どんな名前が好き？」と彼女は車の

なかでいった。世間では合成女中には犬や猫などの愛玩動物につけるような外国風の人名をつけるのが普通だった。たとえばマリイとか、キャロルとか……「そんなのはいやあね、安っぽくて。ちゃんとした日本人のお嬢さんらしい名前にしなうね……ゑり子というのはどうかしら？」「すてきですわ」と合成女は眼を輝かせた。「まえからわたくし、そんな名前がほしいとおもっていましたわ」

翌日、倫子は学校友だちの晴海の家へゑり子をつれていった。いうまでもなくこのすばらしい買物をみせるためだった。ゑり子が家のまえでエア・カーを地上におろすと、玄関から女中が迎えにでてきた。合成女中だが、ゑり子にくらべると格段に見劣りがした。晴海はこの合成女中を昨年の春に買ったのである。二一六〇年型というやつで、六一年型とちがつて個性に乏しいし、それほど美しくもない。そうおもって車からおりたゑり子とみくらべると、晴海の合成女中はゑり子にたいするひけめでもかんじているかのように、顔をこわばらせていっそう醜くみえさえた。もちろん倫子の驕慢なおもいすごしだったというほかない。それにしてもゑり子は自分の美しさを知るのが知らないの

か、嬌然^{えんぜ}とほほえんでいた。

「とうとうお買いになったのね」と晴海はゑり子をみるなり叫んだ。「すばらしいわ!」

「苦労して選んだのよ」と倫子はずむ息を抑えながらいった。「主人もあたしも氣にいつちゃって、これにきめたの」

「高かったでしょう?」

「それほどでもないわ。頭金といっしょに四千万だった」と倫子はさばを読んだ。

「まあ!」と晴海もいにかえた。「あたしはあのキャロルを四千五百万で買ったのよ。合成人間と車は買い急ぐとほんとにばかをみるわね」

「そうね。一年たつと合成人間もずいぶん垢ぬけがするのね。ゑり子は自動調整式なの」

「キャロルもこの夏工場にいれて自動調整式に改造してもらったわ。なにしろ、それまでは取扱に手がかかったものよ。ときどき内臓機能が狂って軽い病氣になるのだけど、自分でそれがなおせなかったの。おまけに十日に一度、電子頭脳に充電してやらなきゃいけないし……それを忘れると、電気が切れたところで弁慶の立往生みたいに硬直して動かなくなったり、支離滅裂の歌をうたって氣違いじみた

踊りをはじめたりするのよ」

ゑり子は口到手をあててくすくす笑った。倫子はゑり子の髪を撫でながら「この子は時間がくるとまちがいに自分で充電するのよ」といい、利発な娘を誇る母親のように笑った。晴海は妬ましげな眼でゑり子をみて、「ほんとにおみごとなできばえね。うちのキャロルにはそんな魅力的な笑いかたなんか、いくら教えてもできないのよ。素質の問題かしら」

そういつて晴海と倫子は笑い、ゑり子は大まじめな顔でそれが頭脳の回路の問題だということを説明しようとしたが、二人ともきいてはいなかった。きいても彼女たちに理解できる話題ではなかっただろう。倫子は笑いやめると声をひそめて、あそこをみたければみせてもよいとささやいた。「いいわよ」と晴海は不機嫌な声で辞退し、ゑり子がみずから倫子の合成人間所有許可書を取りだすのにみむきもせず、これほどみごとな人間は合成にきまつているのではないかと断定するのだった。妙な理窟だとおもいながらも倫子はこのことばですっかり有頂天になった。

「ところで、ゑり子にはなにを習わせるつもり?」と晴海がたずねた。「キャロルにはお茶とお花と日本舞踊をやらせて、いまは黒人の先生について即興演奏のお稽古をやら

せているわ」

「女の子だからもちろんお茶やお花はやらせるつもりだけど、変った芸をしこむのもいいわね。小説を書く合成女もいるそうじゃない？」

「でも悪趣味ね、そんなの」と晴海はきめつけ、彼女のキヤロールにつくらせた蟹のピラフをすすめた。倫子とゑり子は口をそろえて料理をほめたが、晴海は吐きだすようにいった。「だめなのよ。うちのキヤロールにはこの程度しかできないのよ。どうせ六〇年型だから」

それからまる一月のあいだ、倫子は珍しい玩具をあてがわれた幼児のようにゑり子をはなそうとせず、ゑり子なしには夜もねつかれないというふうだった。この偏愛ぶりを夫は至極冷淡に眺めていた。倫子にはそれが不満の種だったが、分別盛りの中年男にとって、自分の妻が、等身大の生きた人形を相手に化粧を教え髪をいじり装身具をつけたりはずしたり服を着せたりぬがせたりして夢中になっているのは、はなはだ共感をよばない図であつたにちがいない。しかもこの生きた玩具は、一家の主人が童心にかえつてたわむれるにはあまりに女らしいのであり、うっかり手でも

ふれようものなら、「あなた、いやらしい真似はおよしになつて」と妻から鋭くたしなめられる光景を現出したことだろう。資郎は自分のことを「おじさま」と呼ばせ、若い娘らしいコケティッシュな微笑をふりまくゑり子を謹厳な気むずかしい態度で黙殺していた。そして黙殺される当の合成娘はともかく、腹をたてていたのは倫子のほうだったといえる。彼女は夫にむかつて、「あなた、ゑり子にこのスーツは似合わない？」とか「このヘア・スタイルはどうかしら？」などと関心を強要し批評を求めるのだったが、じきにこのむなししい努力は諦めてしまった。

倫子とゑり子のはてしない対話の主題は、もっぱら合成人間と天然人間との相違をめぐるものだった。たとえば、合成人間も空腹をかんじるのか？ 料理の味がわかるのか？ 食べたものはどうやって排泄するのか？ 病気になるかないか？ 苦痛をかんじることがあるのか？ 悲しむことは？ 恋をすることはできるか？ 人間の女とおなじように男と交わることはできるのか？ 妊娠と分娩の能力はあるのか？ 髪や爪はのびるのか？ 顔に皺はできないか？ 年をとらないのか？ 死ぬことはないのか？……倫子のように想像力に乏しい女でも、合成女と日常の起居をともにしているとこうした疑問は無限におこってくるもの

だ。彼女は際限もなくたずね、ゑり子の明快な答にひとつひとつ感嘆の声を放つのだった。要するに、ゑり子はほとんどすべての点で人間なみであり、したがって倫子が熱中していたこの対話は、古代の哲学者がこころみたそれと同様に、すぐれて人間認識という性格を帯びていたともいえるのである。

ある朝、ゑり子の顔をみて、倫子は気分でもわるいのではないかとたずねた。「あなた、まさか月経じゃないでしょうね」と倫子は冗談のつもりでいったが、ゑり子は顔をあからめて首を垂れていた。

「まあ驚いた。あなたたちも月経があるの？」

「はい、おくさま」と合成女はいった。「わたくしたちの子宮も人間のおなじように創られていて、ホルモンの支配を受けておりますわ」

「それは、受胎能力がある以上そうでなければならぬだろうけど……でも、なにも月経まで人間の真似をしなくてもいいとおもうのよ。第一、不便で不愉快じゃないの」

「たしかに、人間には不合理な点が多いようですね」とゑり子は合成的な理窟っぽい眼をしていた。「でも、わたくしたちはそういうところもひっくり返して人間をつくりであればあるほど人間のみなさまに好まれるものですから」

倫子がゑり子にたいして奇妙な感情を抱きはじめてのはそのときからだった。それまでのゑり子はもの珍しい人形、人間を完璧に演じてのける精巧な人造人間にすぎなかったが、いまは倫子同様に月々のものにも悩むひとりの女にみえるのだ。ゑり子はいまや平穩な家庭に招きいれられたふしぎな「女」だった。倫子はゑり子の介在が、自分と夫との関係にも、ある種の歪みをもたらしはしないかとかんじはじめていた。当然そういう可能性は勘定にいれられてよかったのだ。ゑり子は人間の女がなしうることはことごとくなしうるように創られており、そのうえ、ありふれた人間の女に数等まさる女性としての魅力を与えられていたのだから、彼女がその気になりさえすれば、それらの力を動員して危険なことを企てるおそれは充分あるといわなければならない。問題はゑり子がその気になるということにかかっている。合成女にも恋することができるのか？ この質問にたいしてかつてゑり子は答えた。「できませんわ。ただ、わたくしたちが人間の男性を愛することは禁じられているのです」だが禁制ほど人間を大胆にするものはない。この心理学が合成人間にも妥当するかどうかは疑問だとし

ても、合成人間の頭脳に刻まれた「禁じられた愛」という観念自体が、倫子には妙に危険なものにおもわれるのだった。いうまでもなく、倫子のうちには自分の生活の軸である夫を防衛しようとする本能が働きはじめていたのだ。この本能はさしあたり彼女の夫への愛などとは関係がない。愛といえ、そんなものは倫子にはもともと無縁だったといえよう。いづれにしても倫子はゑり子を警戒しはじめたのだが、最初は自分でもなにを警戒すべきかよくわかっていなかったかもしれない。

そのころ、倫子の家には夫の姉の息子や、その友だちの大学生、夫の大学の後輩で部下である青年などがときおり遊びにきていた。とくに後者の江口という青年は、ゑり子に少からず熱をあげているようだった。それというのも、かれがはじめてゑり子をみたとき、倫子が悪戯心からゑり子を、自分の姪だと紹介したからである。かれは土曜日や日曜日にはかならずゑり子を誘いにきた。二人は恋心を抱きはじめた恋人同士のように肩を並べて立体映画をみにいたり踊りにいたりしていた。こうなってみると、倫子にはゑり子がじつは合成女であるという残酷な事実が口にだせないのだった。一方、甥とその仲間の大学生たちは最初からゑり子が合成女であることを知らされていた。かれ

らもしばしばやってきたが、その魂胆はあきらかにゑり子を性的に利用しようということだった。「おばさん、この冬、みんなでスキーにいくからゑり子を貸してくださいよ」と甥はいった。「いけません。大事な子だから」すると甥は倫子のことをけち、だとい、すきをみては、仲間たちといっしょにゑり子を抱きすくめ、頸や脚に接吻したり、ゑり子の女性的な部分に猥褻な接触をこころみたりするのを目がはなせないありさまだった。そんなとき、ゑり子は優しい悲鳴をあげるだけでまったく困惑の態であり、倫子はじれったそうに注意を与えた。「遠慮しないでひっぱたいてやらなきゃだめ。男ってみんなああいふ動物なんですからね」

しかし江口のことでは倫子もおもいあまって夫に相談してみるのがなかった。

「いまさら、ゑり子が合成女だなんていうのもなんだかかわいそうでしょう？ 江口さんはいいかただし。できることならゑり子と結婚させてあげたいくらいですわ」

「そんなことができるもんか」と夫はいった。「ゑり子は合成人間だからな」

「わかっています。でも、もしも江口さんがそれでもいいとおっしゃるなら、いいじゃありませんの。合成人間にも